



12月号 (No.9)

2021年11月25日

帝京大学小学校だより

帝京大学小学校

学芸会が行われます

帝京大学小学校 校長 石井 卓之

10月27日(土)、運動会に続き本年度の大きな行事である学芸会が、ソラティオスクエア内のキュリオシティホールで実施されます。私にとっても帝京大学小学校での初めての学芸会ですので、とても楽しみにしています。

18日(金)には、ホールで行われたリハーサルを、1日かけて観ました。昨年度の演劇鑑賞教室で一度使用したので、素晴らしい会場であることは分かっていました。小学校の体育館に比べてかなり大きな舞台なので、子どもたちは客席の後部まで声が届くようにするための体の向きや立ち位置の修正などをした後、各学年が通し稽古を行いました。例年と異なりマスクをしての台詞は、本人が思っている以上に声が届きません。動きや声の出し方はこれからの練習で、さらに修正をしていくこととなります。

一昔前の学芸会は、教師が主導して台詞回しや動き方を徹底して教え込む「型に入れる」方法で行うことが主流でした。確かに見かけ上は練習を重ねるごとに劇の質は向上しました。しかし、子どもたちの「学び」の観点から見ると、身に付けられるものはさほど多くはありません。できないことが積み重ねると、演じることが自体が苦痛となります。教師の「よい作品を仕上げたい」というゴールイメージが先行し、演ずる子どもの目的意識から大きく外れ、できればよいが学びのない劇を何度も見てきました。

今回の学芸会では、練習時間をかなり短縮しました。それは、演劇の質を落とすのではなく、ゴールイメージを教師と子どもが共有し、取り組み方法を変えることで、子どもの意欲を引き出しながらよりよい作品を創り出すことができると考えたからです。まず、「教師の常識」からの脱却が必要でした。作品の完成度を高めるために計画に定められて練習時間を超えて練習してしまうことです。これは従前当たり前に行われてきたことですが、結果として教科の学びが減ってしまいます。そこで、子どもの現状を的確に把握し少し上のゴールを毎回設定し直していくことで、作品の質と子どもの意欲を担保していきました。この間、どの学年も、お互いの演技を見合ったり、映像に撮って(3年生以上はiPadの利活用)相互評価したりしました。高学年はプロのビデオから自身の演技を見直すこともしていました。また、教科横断型の学習を取り入れ、大道具や小道具を図工の時間に作製したり、歌を音楽の時間に練習したりするなどの活動も積極的に行っていました。教科での学びが学芸会に生かされ、学芸会で得た力が教科の学びに生かされるという往還は確かにあります。1年生の先生は、学芸会の練習を通して授業中に発言する声が大きくなってきていますと、教えてくれました。ご家庭によっては、台本の読み合わせにご協力をいただいたこともあったと思います。また、衣装等のご準備も、ありがとうございました。

人間の欲求の一つに「変身欲求」があるといえます。演劇の中には確かにその欲求を満たすものがある気がします。かつての教え子の中に、小学校の学芸会で感じた演じることの楽しさから、現在演劇の世界に入っている子がいます。これも一つのキャリア教育だと考えています。

コロナが収束し、次回の学芸会には子どもたちがマスクをつけずに、思いっきり声を出して演技できていることを祈念しております。

